「グローバルスタンダード」に立脚した中学校の歴史学習の試み

―国立歴史民俗博物館展示室紹介パンフレット作成と プレゼンテーション活動を通して―

東京学芸大学附属国際中等教育学校　秋山寿彦

１．実施学年及び教科・領域

中学校第２学年　社会科歴史的分野

２．学習のねらいと博物館活用との関連について

（１）主題名

中学生のための国立歴史民俗博物館展示室紹介パンフレットを作成してみよう！

（２）ねらい

「新しい学力観」に基づいて観点別学習評価が導入されて 20 年以上が経過し、中学校では、生徒の歴史学習の到達度を、関心・意欲・態度、思考・判断、資料活用の技能・表現、知識・理解という４つの観点から評価することが定着した。しかし、歴史を学習するかなりの生徒は、依然として、歴史上の人物や出来事、年代を定期考査のために「丸暗記」しなければならないととらえている。実際、通勤途中の電車内で、たびたび目にする生徒の歴史を勉強する姿は、教師が配布した学習プリントやノートに書かれた重要語句を赤ペンでマークし、緑色の下敷きを被せて、ひたすら「暗記」に励むというものである。そのため、山本博文[註1]が指摘する「細かい史実を中心とした勉強に終始してしまい、歴史に対するイメージが形成できないまま、いわば歴史を『つかめない』ままで終わっているという現状」がみられる。

基礎的・基本的知識を習得することの重要性を否定するものではないが、OECD による国際学力調査（PISA）で重視される、生徒が習得した知識を活用する学習の充実を歴史学習においても図っていくことがもとめられる。

このことは同時に、歴史の授業を、一斉授業を基本とした教師による説明・講義中心型という生徒にとって「受信」型学習から、教師が提示する資（史）料を生徒一人一人が、主体的に探究し、読み解いていく活動や、協働・協同・共同的な話し合い活動・プレゼンテーション・ディベート等の双方向型コミュニケーション活動、パフォーマンス課題を設定した表現活動を通して、他者にむかって「歴史を学び意味をどのように考えるのか」という本質的な問い（essential question）に基づく自分の考えや意見を表現する「発信」型学習へ転換していく必要性を意味する。

中学校学習指導要領[註2]においても、「機械的・表面的な『記憶』だけ」ではなく、「焦点や脈略をもった自分の言葉で表現」できる力の育成[註3]が重視されている。

さらに、グローバリゼーションが加速化するなかで、日本学術会議[註4]は、後期中等教育（高等学校）の歴史学習では「知識詰め込み型」から「歴史的思考力（中学校においては、歴史について考察する力や説明する力に相当）育成型」としていく方向性を示す

提言をまとめた。

東京学芸大学附属国際中等教育学校（以下：ISS）は、教育における有力なグローバルスタンダードととらえられ、文部科学省が 200 校での導入を検討している国際バカロレア機構（以下：IBO）のミドルイヤーズプログラム（以下：MYP）の認定校として６年一貫の中等教育に取り組んでいる。また、日本の歴史について学習した経験を持たない海外での教育体験生徒（「帰国生」）や外国人生徒という多様な学習履歴を有する生徒が約 30%を占める。

IBO の MYP では、実施校での学習評価が同じ基準でなされることを求めている（「学びの質保証」）。それを担保していくために、学習する評価の規準と基準を定め、授業及び学習活動を学習する生徒に提示する「逆向き設計」していくことがもとめられる。2013 年に行われた MYP・HUMANITIES（歴史）の改訂では、学習評価の観点として、知識理解・批判的思考力とともに新たに、調査・コミュニケーションという２つの観点が新たに設定された。そして、これらの４つの観点は、同じ比重で、総合され、７段階で学習評価・評定がなされる。MYP では、定期考査を中心した知識理解に重きを置いた学習評価を行うことは認められない。

国立歴史民俗博物館（以下：歴博）展示室パンフレット作成に取り組んだ本実践は、MYP・HUMANITIES（歴史）の調査及びコミュニケーションに関する学習を中心としたものである。

（３）博物館との関連

MYP では、各教科で、教科書だけに依拠して学習を展開している場合、認定訪問において多様な学習リソースや博物館をはじめとする学校以外の施設や人材を活用するように指導・助言を受ける。ISS では、各学年で、学校が位置する練馬区の地域の特色や歴史、日本の文化と伝統、先端科学・医療、国際理解等をテーマとするフィールドワークに、沖縄やカナダ・バンクーバーへのワークキャンプと関連を図って実施している。

また、HUMANITIES（歴史）では、美術・音楽・テクノロジー・総合的な学習等と有機的に結びつけた教科間連携と「学習の姿勢」・「人間の創造性」・「環境への働きかけと影響」・「コミュニティーサービス」という学習領域の相互作用を意識した「ホリスティックな学び」をめざしていくことがもとめられる。歴博に限らず博物館は、MYP が明示する学習の相互領域を、本来的に具現化した施設であることから、生徒による調査活動にとって最適の場と考えられる。

MYP・HUMANITIES（歴史）では、学習内容に関する拘束はなく、学習指導要領で示されるナショナル・スタンダードに基づく日本の標準的なカリキュラムで歴史学習を展開していくことが可能である。ただし、原始・古代から近現代という時代を大きく区分する概念や発展、文明（文化）と民俗（生活）の多様性等の歴史学習に関する重要概念を生徒が形成・獲得していく学習過程を明示したカリキュラム編成及び学習指導のあり方がもとめられる。

一方、中学校学習指導要領においても、「時代を大観し表現する活動」や「時代全体の特色をとらえさせる」学習が重視されている。原始・古代・中世・近世・民俗・近代

・現代という６つの展示室から構成される歴博を活用した見学・調査活動を、歴史学習のカリキュラムに位置づけることは、中学校の歴史学習のねらいに迫っていくためにきわめて有効である。

特に、民俗学の成果を取り入れて日本人の生活や生活に根ざした文化を学習する際、第４展示室のデパートやスーパーのお節料理、沖縄県をはじめとする全国の観光みやげグッズや招き猫・ビリケン人形という招福グッズ、女性の美容・化粧という身体装飾、河童や妖怪に関する伝承や人々のしぐさという心性、ひな祭りをはじめとする祭や伝統行事、農村・漁村・山村における技や生業が示す暮らしに関する展示は、民俗に対する理解を深めるとともに日本列島の歴史や生活の基層に迫っていく新たな視点を中学生に提供するものとなっている。

３．指導計画

過程	時間	○学習活動　　●学習内容	指導上の留意点
事前指導	50分	●パフォーマンス課題:国立歴史民俗博物館展示室紹介パンフレット作成 ○メディアセンターで歴博ホームページにアクセスし、歴博の概要を理解する。 ○歴博作成のパンフレットを読み、各展示室の概要を知る。 ○自分が興味・関心を持ち、作成するパンフレットで取り上げる展示室を決める。 ○わからない点や迷っていることについての個別相談。	・中学生による中学生のためのパンフレットであることを伝える。 ・気づいたことや取り上げることを決めた理由をワークシートに記入する。 ・パンフレットの形式と評価規準・基準については次時へ。
パンフレット作成概要	50分	○作成するパンフレットの概要をとらえる。 ●パンフレットの規格（A4版横長・２つ折り・両面） ●外観（文字の丁寧さ、タイトルや見出しの工夫、写真の活用、アート的工夫の試み） ●パンフレットの内容構成 ・歴博の見学、調査に基づく内容 ・展示室に対する自分の興味・関心の反映 ・歴博パンフレットや展示室解説を活かし自分なりに工夫 ・他者にわかりやすく、楽しく伝える工夫 ○パンフレットの「絵コンテ」（下書き） ※評価基準に関しては、＜表１＞を参照	・第１学期に作成した歴史人物新聞の学習経験を活かす助言を行う。 ・歴博見学の自分の目標が明確になるように支援する。 ・手書き、パソコンの使用のいずれでも可とする。 ・日本語だけではなく英語・中国語・ドイツ語・ポルトガル語での作成も可とする。

歴博見学調査	150分	○見学、調査に関するガイダンス ●第４展示室（民俗）に関するオリエンテーションを常光徹先生から受ける。(30分) 妖怪だけではなく民俗展示全般を読み解く基礎的な視点を持つ。 ●展示室で見つけた紹介したいもの、面白いもの、興味を持ったものを記録用紙にメモをするとともに、パンフレットで紹介したい展示物について写真撮影する。 ○見学、調査のまとめ ●展示室を見学、調査して「発見」したことを発表する。(10分)	・持ち物、写真撮影に関する注意 ・常光先生に対して質問が出せるよう生徒を支援する。 ・入室直後、20分程度で、展示室を概観し、その後、興味関心のあるものを焦点化する。 ・パンフレット作成の見通しについて確認する。
○パンフレット作成は、適性検査実施期間中の課題とした。また、作成したパンフレットを活用してのコミュニケーション活動についてのガイダンスを行う。評価規準に関しては、＜表２＞を参照。			
歴博パンフレットプレゼンテーション	50分	○作成した歴博展示室紹介パンフレットを活用したプレゼンテーションを行う。 ●プレゼンテーションを、作成した原稿を見ないで行えるように練習する。 ●輪番で司会進行を行い、プレゼンテーション内容のよい点、課題点をワークシートに記録する。 ●小グループでのプレゼンテーション活動に関する感想や意見を発表する。	・４人グループで１人、５分とする。 ・クイズや飛び出す絵本的な工夫をアピールするよう助言する。 ・パンフレットに取り入れることができなかったことの説明も可。

歴博展示室紹介パンフレット作成の評価規準・基準

＜表１：【調査】に関する評価規準＞

評価	体裁・形式	外観	内容構成	展示室の特色のとらえ方
0	サイズがA4でない。	乱雑で、読めない。	見学・調査に基づく内容となっていない。	時代や生活の大きな特色や変化に目が向いていない。
1～2	横長・2つ折りではない。	誤字脱字が多く、読みにくい。	歴博パンフレットや解説展示だけに頼った内容にとどまっている。	個別展示を時代の特色や変化と結びつける点が十分でない。

3～4	片面だけしか使用していない。	文字が読みやすく、丁寧である。	自分が興味・関心を持ったことや発見したことが表されている。	自分の興味・関心を持ち発見したことを時代や生活の大きな特色や変化と結びつける努力がみられる。
5～6	一部の面が使用されていない。	タイトルや見出し等の構成上の工夫がみられる。	自分の興味・関心と展示解説を関連づけることができている。	時代や生活の特色や変化を生み出す技術や制度・システムに着目し、自分の見方や考えをまとめることができている。
7～8	両面が使用されている。	色の使い方やデザイン等のアート的な工夫がされている。	他者にわかりやすく、楽しく伝えることが意識された工夫がされている。	見学・調査を補充する調べ活動がなされ、時代や生活に対する自分なりの見方や考えを深めることができている。

＜表２：【コミュニケーション】に関する評価基準＞

評価	プレゼンテーションの準備	プレゼンテーションの形式	プレゼンテーションの内容	プレゼンテーション活動への参加
0	プレゼンテーションの原稿を作成できていない。	プレゼンテーションを行わなかった。	パンフレットと関係のない内容であった。	友達のプレゼンテーションを全く聴いていなかった。
1～2	プレゼンテーション原稿が文章化されていない。	声が小さく、聞き取れないものであった。	展示室の特色が十分に伝わってこない内容であった。	友達のプレゼンテーション活動に十分に興味関心を持てず、共感的に聴くことができていない。
3～4	プレゼンテーション原稿を文章でまとめられている。	プレゼンテーション原稿を読みながら、発表した。	展示室の特色が伝わってくる内容であった。	友達のプレゼンテーションを集中して聴くことができ、良い点や発見を記録することができた。
5～6	プレゼンテーション原稿が発表時間を意識し、まとめられている。	プレゼンテーション原稿を活かしてわかりやすく効果的な発表をした。	展示室に対する自分の興味関心が明らかにされ、時代や生活の大きな特色が伝わってくる内容であった。	友達のプレゼンテーションに対する質問や感想を提示し、共感的に活動に参加することができた。

7 ～ 8	原稿の推敲がなされ、起承転結が意識されている。	原稿を見ることなく、パフォーマンスを交えた楽しいプレゼンテーションを行った。	教科書や資料集の活用やこれまでの学習経験を活かし、展示室資料に対する自分なりの読み解きや解釈が試みられている内容であった。	友達のプレゼンテーションを、論理的分析的にとらえ、時代や生活の大きな特色を確認・把握することに努めた。

４．実践の概要

本実践は、指導計画に示した事前指導を 12 月中旬に行い、冬期休業期間を活用して、6 つの歴博展示室のいずれを見学・調査の対象するか・作成するパンフレットの構想をまとめることを学習課題とした。

歴博調査・見学活動は、2014 年 1 月 11 日～13 日、18 日の学校休業日を活用し実施した。家庭の都合、部活動の練習や試合を考慮し、前記の期日に参加ができない生徒に対しては、身近な地域の博物館・資料館を対象とした活動代替案を用意したが、今回は、115 名の生徒全員が 4 回にわたり、歴博を見学することができた。

特に、1 月 11 日の訪問では、民俗展示担当の常光徹歴博教授による特別ギャラリートークにおいて歴博が民俗をどのような視点から位置づけているのかという中学生に対する民俗学オリエンテーションが、第 4 展示室で行われた。

５．成果と課題

今回、歴博の訪問型博学連携研究の対象とした生徒は、小学校第 6 学年における社会科歴史学習において、人物や文化遺産を中心とする構成となっていることから、第 1 学期の調査・コミュニケーションに関する学習として、「歴史人物新聞」の作成[註5]をパフォーマンス課題として設定した。海外での教育体験を有する生徒に対しては、日本の歴史学習で取り上げられることがない人物を選んでもよいと指示した。アメリカ合衆国での滞在経験のある生徒のなかには、アフリカ系（黒人）市民解放や公民権運動にかかわるフレデリック・ダグラス、ジャッキー・ロビンソン、ローザ・パークスを選択している点に本校生徒の歴史への関心のありかたの特徴の一端がみられる。

「夏期休業期間」から第 2 学期はじめにかけて、身近な地域の祭や伝承を中心とする民俗、祖父母を中心とする身近な人々が経験した戦争体験、高度経済成長期の日本についての聞き取り（インタビュー）調査を行い、レポートにまとめることを学習課題[註6]とした。

また、太平洋戦争の学習では、歴博の貸し出し教材「戦争ポスター」を活用したことから、学校がある東京都練馬区からは、約 2 時間の所要時間を必要とする歴博への訪問学習への生徒の意欲は、予想以上に高いものがあった。

約 35％の生徒が、下記のような理由から、第 4 展示室＝民俗を紹介するパンフレットの作成に取り組んだ。

＜生徒記述１＞

「和食」が世界文化遺産に登録されたことや、郷土料理について調べることが家庭科の「冬休みの宿題」となっている[註7]こととお正月を迎える時期を考えると、歴史の学習では、きちんと取り上げられることがなかった民俗について調べてみたいと思いました。それだけでも理由としては十分かなと思いますが、河童や妖怪を研究し展示もされているなんて想像もしていなかったので第４展示室に決めました。

＜生徒記述２＞

小さい頃から海外での生活が、結構長かったので歴史だけではなく、日本人なのに日本のことをあまり知らないから、第４展示室を選びました。また、民俗のことでは、きっと歴博が、日本で一番「気合い」が入っているのではないかと思ったからです。アニメやゲームなどのクールジャパンとのつながりからも民俗を調べてみたいと思いました。

＜生徒記述１＞から、MYP で重視される郷土料理・お節料理に着目することで家庭科と民俗の学びのつながりを読み取ることができる。しかし、各時代における生活文化や人々の心性に関する学習が、現在の歴史学習のカリキュラムで十分に位置づけられていないことも明らかとなった。さらに、河童や妖怪に関する展示がされていることや「えんがちょ」などのしぐさは、多くの生徒が抱いていた歴史学や民俗学という学問に対する先入観に、新鮮な知的衝撃を与えた。

また、＜生徒記述２＞にみられるように現代から民俗へのアプローチを試みる中学生にとって、第４展示室に、化粧品など身体装飾、雑誌が展示されていることが、「滅び、消えゆこうとしているむかしもの」だけが民俗学の研究対象ではないという視野の広がりを生み出した。

中学校社会科歴史的分野の学習においては、時代の大きな特色や変化をとらえることが近現代史の学習の充実とともに課題とされていることに関しても、戦争と高度経済成長期の日本の生活までをカバーしている歴博展示から学ぶことは、中学生には大きな意味を持つ。歴博のこのような特色は約 20%の生徒が、近現代を対象とする第５・６展示室を選択することに結びついたと考えられる。

＜生徒記述３＞

ここのところ授業では、「近代日本」の学習をしてきたが、100 年以上もむかしのことのことでドラマなどの映像を授業で見てもいまいち、ピントこないという感じでした。第５展示室は「近代」だから、僕の「近代」理解をすっきりとさせてくれるものだと密かに期待している。

＜生徒記述４＞

「現代」を展示する部屋があることは、驚きです。映画・「ALWAYS　３丁目の夕日」や夏休みに父・母に聞いた東京オリンピックや高度経済成長のころの日本についての展示を中心にパンフレットを作ってみようと思いました。ゴジラの模型を是非撮影したいです。

本実践のパンフレット作成と同時に進めた近代日本の学習では、2014 年１月に NHK

総合で放送された「足尾から来た女」と「1914　幻の東京～よみがえるモダン都市～」を映像教材として取り上げたが、＜生徒記述３＞にみられるように全編を視聴することが時間的に難しいことから十分に消化できない点が残った。しかし、女子生徒には、第５展示室をパンフレットで取り上げることで近代日本の女性をめぐる問題を台所の道具やポスターに描かれた姿からつなげることができたとの意見が出された。

さらに、割合からみるとまだ少数であるが、＜生徒記述４＞のように歴史学習における学習課題の連続性をとらえた生徒が、出てきたことを成果ととらえたい。

学校教育における「グローバルスタンダード」ととらえられる MYP・HUMANITIES でもとめられ、中学校歴史学習において改善が必要とされる歴史に関する調査やコミュニケーション、歴史的思考力の育成に取り組んでいくとき、中学生の発達段階を考えると、展示資料・解説理解に不十分な点が残るとしても、生徒が自分の興味・関心に基づいて、歴博展示室を探究し、歴博での学びをパンフレットに再構成する「構築主義的な歴史学習」のあり方をさらに検討していきたい。

６．私が考える歴博活用案

ISS では、生徒に対する社会科歴史学習の指導とともに年間、150 名を超える教育実習生を受け入れることを使命としている。これから教師となることをめざす教育実習生にも、博物館との連携を図った歴史学習のあり方を是非、経験してもらいたいと考える[註8]。そして、生徒が作成した歴博展示室紹介パンフレットを授業で活用することを考えたい。

（１）学習主題　近代日本の歩み・「文明開化―国立歴史民俗博物館展示室資料活用の試み―」

（２）本時の目標

①明治初期の「文明開化」期に、産業化や工業発展を遂げ、世界への進（侵）出を本格化した欧米の新しい文化や制度受け入れの実態を具体的に理解する。

②明治政府が推進した「文明開化」政策は、東京を中心とする一部の地域とそれ以外の地方では、受け入れに大きな「温度差」があったことを理解する。

（３）本時の展開

時間	○学習活動　●学習内容	指導上の留意点
導入 ５分	●明治の「文明開化」でどのような変化が起きたか。	第３展示室・寺子屋「れきはく」体験のビデオ
展開 I 15分	○寺子屋と明治の小学校の違いを、ISS生が作成した歴博紹介パンフレットから見つけよう。 ・学校建築様式・学習内容（音楽・体育・理科）・学習形態・指導者 ○江戸時代までの日本人が聞いていた音と楽器 ●「食」から「文明開化」期の生活の変化をとらえる。	山梨県の小学校の写真、オルガン・小学唱歌の音声、楽譜 和太鼓・三味線の音声 第４展示室・お節料理の写真

	○「文明開化」期に西洋から入ってきた食べ物は、カステラ・天ぷら・牛丼（牛鍋）・ナポリタン。	ISS生が作成した歴博紹介クイズ
展開 Ⅱ 15分	●「文明開化」とそれ以前を生活の様子を対比表にまとめる。 ○明治初期の人々は、「文明開化」を肯定的に受け止めていたのか、否定的に受け止めたのか。 ○「お雇い外国人」であるエドワース・モースが撮影した写真に撮影された明治の日本の人々の姿を読み解く。 ・江戸時代と服装や道具、仕事はそれほど変わらない。 アイヌの人々も写真に記録されている。	ワークシートを配布 資料「東京開化名勝京橋石造り」「銀座通り煉瓦商家」の図 江戸東京博物館「明治のこころ―モースが見た庶民のくらし―」展に関するISS生の新聞投書＜「江戸東京博物館で感じたこと」毎日新聞・11月27日＞
まとめ	○「文明開化」期の民衆の生活をグループで話し合う。 ・埼玉県における民衆の風俗に関しての通達を表した絵図の読み解き。 ・グループの代表生徒が、資料から気づいたことやわかったことをテレビモニターを活用して発表する。 ○民衆の生活や習慣の実態と明治政府の「文明開化」政策を対比して、気がついたことをノートにまとめる。	第５展示室資料「開化因循興廃鏡」の写真を大型テレビモニターに投影

（４）評価の観点

①【知識理解】

文明開化期に始まる新しい生活と江戸時代までの人々の生活を、歴博紹介パンフットや資料に基づき具体的に理解することができたか。

②【コミュニケーション】

歴博の展示をはじめとする資料を、グループ活動を通して、読み解くことができたか。

③【批判的思考力】

「文明開化」を、推進した明治政府や新しい文化をすぐに受け入れた東京都市部の人々の視線と農村部（地方）の人々の視線から多面的多角的にとらえることができたか。

註１ 山本博文『歴史をつかむ技法』P．17　新潮社　2013 年

註２ 文部科学省『中学校学習指導要領解説　社会編』　ｐ．15　2008 年

註 3 歴史学習における生徒の「意見発信」活動としては、次のものが新聞に掲載された。「歴史を学ぶ意味」（毎日新聞４月 21 日）、「歴史を学び正しい判断を」（東京新聞４月 24 日）、「歴史を学ぶ２つの意味」（東京新聞４月 24 日）、「MYP 歴史学習」（東京新聞５月 21 日）、「歴史認識が学習の基礎」（東京新聞５月 21 日）、「歴博貸し出し教材『戦争ポスター』を活用した学習」（東京新聞６月 12 日）、「衝撃受けた少年兵募集」（読売新聞６月 18 日）、「戦争の記述少ない」（読売新聞６月 18 日）。

註 4 日本学術会議『新しい高校地理・歴史教育の創造―グローバル化に対応した時空間認識の育成―』2011 年

註 5 太平洋戦争に関して、沢村栄治を取り上げた新聞への投稿として、「沢村栄治の人生変えた戦争」（朝日新聞８月 10 日）、アンネ・フランクを取り上げたものとしては、「本を破った人は反省して」（毎日新聞３月６日）が掲載された。

註 6 民俗を対象とする板橋区教育員会主催・平成 25 年度櫻井徳太郎作文コンクール小・中学生の部で、祖母の戦争体験と地域の変貌を表した作品が最優秀賞を受賞した。

註 7 和食の世界文化遺産登録及び郷土料理に関する新聞への投稿は、「和食の良さ継承したい」（読売新聞・12 月 2 日）、「無形文化遺産登録　真の和食伝えたい」（読売新聞・12 月 26 日）、「愛着湧いた『おっきりこみ』」（読売新聞・１月 30 日）、「郷土料理の大切さに触れる」（毎日新聞・２月 27 日）が掲載された。

註 8 平成 24 年・25 年度は、各年度４名ずつ、合計８名の教育実習生が歴博を訪問し、展示資料を授業で活用することに取り組んだ。